

摘、脾臓合併切除、D2郭清、大動脈周囲リンパ節サンプリングを施行した。病理組織診断にて根治術と診断され、組織学的効果は grade I b と判定された。術後さらに TS-1/CDDP を4コース継続したが、術後8ヶ月にて大動脈周囲リンパ節再発をきたし2010年3月大動脈周囲リンパ節郭清を施行した。病理診断では胃癌の転移であった。その後も TS-1/Paclitaxel, TS-1/CPT-11 を継続、現在多発肺・肝転移を認めながら治療開始後2年生存中である。

#### 4 小腸内視鏡で診断した小腸癌の1例

齋藤 敬太・石塚 大・植木 匡  
多々 孝・若桑 隆二・五十川 修\*  
丸山 正樹\*・佐藤 俊大\*

厚生連刈羽郡総合病院 外科  
同 内科\*

症例は63歳、男性。平成22年9月上旬より左上腹部痛と便秘あり。便潜血陽性のため上部消化管内視鏡と大腸内視鏡を行ったが、異常はなかった。CTにて左上腹部に腫瘍性病変と小腸間膜リンパ節腫大・傍大動脈リンパ節腫大を認めた。小腸原発と考へて小腸内視鏡を施行したところ、Triez 韌帯より肛門側に60-70cmのところに2型腫瘍を認め、生検で tub1 であった。平成22年11月に手術施行し、小腸部分切除・傍大動脈リンパ節郭清を行った。切除標本の病理所見は tub2, SS, INF  $\beta$ , ly1, v0, LN 6/8 で、pT3N1M1 f-stage IV であった。経過は良好にて術後14病日で退院となった。現在、術後補助化学療法として TS-1 120mg/day を2投1休で4コース目である。術後4ヶ月現在、再発を認めない。

#### 5 腹腔鏡下虫垂切除術における吸引式ドレーンの有用性

荒井 勇樹・窪田 正幸・奥山 直樹  
小林久美子・塚田 真実・仲谷 健吾  
大山 俊之

新潟大学大学院 小児外科学分野

【背景】虫垂切除は腹腔鏡手術の良い適応であるが、ペンローズドレーン(PD)では術後膿瘍形成例を予防できず吸引式ドレーン(吸引D)に変更した。その有用性を検討した。

【症例と方法】症例は過去10年間に虫垂切除術を施行した68例である。

【結果】68例中ドレーン留置は30例で、PDは27例(開腹12,鏡視下15),吸引Dは3例(開腹1,鏡視下2)であった。術後膿瘍形成のため再ドレナージ術となったのは6例で全例PD例(開腹1,鏡視下5)であった。初回ドレナージのみは4例[PD3(開腹1,鏡視下2),吸引D1(開腹)]で、再手術となったのはPD2例(開腹1,鏡視下1)であった。

【結語】鏡視下手術でのPD留置例は術後膿瘍発生率が高く、吸引Dは膿瘍形成予防に有用と考えられた。

#### 6 当科における小児胆石症15例の検討

飯田 久貴・飯沼 泰史・平山 裕  
橋詰 直樹・新田 幸壽

新潟市民病院 小児外科

小児胆石症(以下本症)は比較的まれな疾患である。当科で経験した本症15例に対し、それらの臨床的特徴を後方視的に検討した。年齢は1-17歳まで平均8.4歳で性差なく、胆石の発見契機は腹痛が8例と最多で、自覚症状を伴わない偶発的発見例も5例あった。

13例が腹部エコー、腹部単純X線のいずれかで診断されていた。また、開腹手術術後が4例、遺伝性球状赤血球症が3例と基礎疾患を有する例が多く、特発例は2例のみであった。結石は炭

酸カルシウム石と黒色石が各4例ずつで、残りは混成石であり、成人に多いコレステロール結石は無かった。今回の検討において本症は、基礎疾患や新生児期の治療歴に関連性のある可能性が示唆された。ゆえに、このような疾患背景を有する腹痛患児の診療では本症も念頭に置き、外科的治療の介入を含めた対応を考慮するべきである。

## 7 特異な形態を示したイレウスの1例

近藤 公男・大澤 義弘・桃井 貴裕\*  
生井 良幸\*

太田西ノ内病院 小児外科  
同 小児科\*

症例は12歳、女児。既往歴に特記事項なし。平成22年5月頃より腹痛、腹部膨満を繰り返し、7月5日イレウスの診断で入院となった。イレウス管造影、内視鏡検査の結果、終末回腸に全周性の狭窄を認め、7月15日開腹術を施行した。終末回腸の漿膜側が広範囲に渡り白色調の膜で覆われており、壁肥厚も伴っていた。同部が通過障害の原因と判断し、壁肥厚の著明な終末回腸約20cmを切除した。切除腸管を切開すると、約30cmの回腸が長軸方向に折り畳まれていたが、内腔に閉塞はなく、粘膜面にも特に病変は認めなかった。病理組織学的には漿膜側の膜は癒痕組織で、陳旧性の腹膜炎が疑われた。術後経過は良好で、現在まで再発はない。

## 8 予期せぬ胆汁性腹膜炎の1小児手術例

内山 昌則・村田 大樹・青野 高志\*

県立中央病院 小児外科  
同 外科\*

小児の腎生検時に胆嚢穿刺により腹膜炎をきたし緊急手術治療したので報告する。

症例は14歳、男児。近病院で12歳時にIgA腎症と診断されステロイド投与が続けられていた。同病院で今後の治療判定のため右腎生検が行わ

れた。針穿刺後から強い腹痛と嘔吐が発現し禁食輸液抗生剤投与で治療された。翌日腹痛が増強しCTで腹水の増量を認め腸管穿孔を疑われ当科に緊急搬送された。腹部は筋性防御・反跳痛も強く腹膜炎所見であった。腎生検に関連した腸管損傷と考え同日緊急手術した。開腹術では粘稠性黄色腹水がみられ胆嚢に穿孔を認め胆汁性腹膜炎であり、穿孔部は吸収糸を用いたタバコ縫合で閉鎖した。右後腹膜に出血痕をみとめ結腸を授動して探索したが腸管損傷はないと判断し、ドレーンを3本挿入し閉鎖した。術後漿液性の腹水が多量に排出されたが、ステロイド投与を持続し経過良好で12日目に退院となった。

腎生検の合併症は出血が主で他臓器損傷など散見されるが、胆嚢穿孔は非常に稀であった。

## 9 心原性ショックから救命し得たBWG症候群(左冠動脈肺動脈起始症)の1手術例

渡邊 マヤ・白石 修一・高橋 昌  
小澤 淳一\*・羽二生尚訓\*・長谷川 聡\*  
鈴木 博\*

新潟大学大学院 呼吸循環外科学分野  
同 小児科学分野\*

症例は生後3か月の女児。哺乳不良、嘔吐、顔色不良にて急患センターを受診。済生会第二病院に搬送されたが、ショック状態になりバック&マスク換気されながら新潟市民病院に搬送。直ちに挿管、人工呼吸器管理となった。著明なアシドーシス、EF<20%、severe MRを認め心原性ショックと診断。当初、拡張型心筋症などが疑われた。8病日にUCGで肺動脈内に左冠動脈と考えられる逆行性血流を認め、BWG症候群を疑われて当院に転院。CT所見でBWG症候群と確定診断。循環動態が維持されていたため、shock liver、DICの改善を待ち、14病日に手術施行。肺動脈から左冠動脈が起始しており、coronary cuffを作成して左冠動脈を肺動脈へ直接吻合した。虚血性僧帽弁閉鎖不全症に対しては手術介入しなかった。術後2日目に人工呼吸器を離脱。術後、EF、MRの改